吉川（よしかわ）　みな子

京都大学アジア・アフリカ地域研究の研究科後期博士課程に所属し、東南アジアで越境する感染症研究(JSPS 科研)チームのメンバーであり、日本渡航医学会と日本熱帯医学会の会員である。日本の大学から奨学生として 4 年次編入した、米国ミシンガン州ホープカレッジから準最優等成績で卒業し、政治学と国際関係分野を中心とした社会科学専攻で学士号を取得している。米国ペンシルヴァニア大学ウォートン校より、経営学修士号（ファイナンスとマーケティングの両専攻）を取得し、在学中は医療・製薬産業のプロジェクトにも携わった。2006 年に学業復帰する以前は、東京・ロンドン・香港にて欧米の金融機関に勤め、おもに各国のマクロ経済、金融情勢、政治体制を注視しながら、アジアの政府関連機関、銀行や主要企業を対象として資産・負債の総合管理のマーケティングに従事した。これまでの多岐にわたるボランティア活動の一例としては、重症急性呼吸器症候群（SARS）流行時の 2003 年に、香港親善大使の 1 人として現地日本人社会の活動を促進しながら、香港で感染者を多くだした高層住宅の患者家族を訪問し、香港医院監督局にて医療関係者の労をねぎらうイベントにも参加している。

研究関心分野

2006 年 4 月以来､新興･再興感染症の分野における東南アジア地域独自の処方箋を求めることを目的として、文献ならびに臨地調査による研究を特にシンガポールに焦点をあてて進めてきた。今後は調査地を拡大しながら、デング熱・デング出血熱を中心に東南アジアで越境する感染症に着目して、観光地固有の課題についての比較研究に従事する予定である。研究活動を通じて現代の新興・再興感染症に対する社会認識と理解をアジアで一層深めることにも貢献したいと望んでいる。過去数年の SARS や高病原性鳥インフルエンザの流行をみても、東南アジア地域が依然として脆弱な環境下にあることは否定できない。ことに大量の人口をかかえ、国境を超える人々の移動が急増し都市化傾向が著しい東南アジアは、公衆衛生や医療体制が不十分なだけでなく、資本や技術・人的資源が不足しがちな地域を多く含むことから、国を超えた地域協調体制構築の試みが今後も進むことを切望している。博士予備論文ではシンガポールの SARS とデング熱・デング出血熱に対する取り組みについて、対策の成果と問題点の両面を複数の学際的視野と臨地研究から分析し、新興・再興感染症の対応に、公衆衛生上の施策を支える政治的指導力が大きく寄与したことを示した。また、シンガポールでの取り組みを、将来東南アジア地域においての対策へ応用できる可能性を示唆した。

論文など

吉川みな子 2008「邦人にとってのシンガポールでの医療事情」『海外勤務と健康』27: 33-6.

吉川みな子 2007「書評 *Population Dynamics and Infectious Diseases in Asia*, by Sleigh AC et al.」『東南アジア研究』45(2):276-9.

Yoshikawa, Minako (Jen). “Struggles with Emerging and Re-emerging Infectious Diseases in Urbanizing Southeast Asia: Singapore as a Case Study.” Kyoto: Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University, Japan, 2007. (博士予備論文)

Yoshikawa, Minako Jen et al. “Chinese Market Opportunities: Carvedilol and Androderm Testosterone Patch.” Philadelphia: The Wharton School, University of Pennsylvania, U.S.A., 1995. (修士論文)

学会発表

吉川みな子・西渕光昭（2008 年 10 月 25 日）「シンガポールにおけるチクングニヤ熱の早期制御：政治的意志を体現する都市国家の対策」第 49 回日本熱帯医学会大会・第 23 回日本国際保健医療学会学術大会合同大会